

イネ縞葉枯病情報第1号

令和6年6月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

西三河地域南部の一部地点で採取したヒメトビウンカの イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い

1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査の結果

5月中旬から6月中旬にかけて県内22地点の畦畔雑草等からヒメトビウンカを採取し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査した結果、表1のとおりとなりました。

22地点の平均保毒虫率は1.44%（平年値：4.72%）で、平年と比べやや低い状況でしたが、一部地点では保毒虫率が経済的被害水準である5%以上となりましたので、注意が必要です。

表1 ヒメトビウンカの縞葉枯ウイルス保毒虫率
（簡易ELISA法により検定）

調査地点	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
弥富市 鍋田町	12	0	0.0
飛島村 新政成	10	0	0.0
長久手市 農総試内	16	0	0.0
豊田市 田代町	17	0	0.0
前林町	30	0	0.0
中町	19	0	0.0
和会町	45	1	2.2
福受町	22	0	0.0
刈谷市 小垣江町	27	0	0.0
安城市 里町	36	0	0.0
赤松町	45	1	2.2
榎前町	12	0	0.0
高棚町	10	0	0.0
寺領町	30	0	0.0
岡崎市 在家町	28	0	0.0
碧南市 縄手町	12	1	8.3
西尾市 小栗町	35	1	2.9
一色町養ヶ島	11	0	0.0
吉良町吉田	16	0	0.0
小焼野町	22	3	13.6
和気町	19	0	0.0
豊川市 御津町広石	13	0	0.0
計	487	7	1.44



図 イネ縞葉枯病（ゆうれい症状）

2 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）（前ページの図）。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

ヒメトビウンカは、幼虫で水田周辺のイネ科雑草等で越冬します。4月上旬頃に成虫になり、ムギ畑に飛来して一世代経過し、増殖します。その後、成虫が水田に飛び込み、保毒虫がイネにウイルスを感染させます。また、本ウイルスは経卵伝染するため、保毒虫は次世代もウイルスを保毒します。ヒメトビウンカの保毒虫率が5%以上となると、イネ縞葉枯病発病株率が10%を超え、経済的な被害を与える可能性があります。

本県で栽培されている「あさひの夢」、「ゆめまつり」、「あいちのかおりSBL」、「大地の風」、「ミネアサヒSBL」などは本病に抵抗性を有しますが、「コシヒカリ」などは感受性であるため、注意が必要です。

3 防除対策

抵抗性品種の作付けが少なく、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施薬を実施していない地域や、不耕起V溝直播栽培で殺虫剤の種子塗抹を実施していない地域では、表2を参考に、幼穂形成期までに水田に侵入する成虫と次の世代の幼虫を対象とした、本田防除を実施しましょう。

表2 イネのヒメトビウンカに対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	IRACコード
トレボンEW	収穫14日前まで	散布	3回以内	3A
トレボンエア	収穫14日前まで	無人航空機による散布、 空中散布	3回以内	3A
スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10	収穫7日前まで	散布、無人航空機による散布、 空中散布	3回以内	4A
スタークル豆つぶ	収穫7日前まで	散布	3回以内	4A
ダントツ水溶剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4A
ダントツ粒剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4A

令和6年6月17日時点の農薬登録情報です。

成分ごとの総使用回数に注意しましょう。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示します。

IRACコードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf を参照しましょう。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。